上野彦馬とその時代

姫野順一

⑬ 明治初期アルバム

円熟期迎えた写真術

慶応3（1867）から明治元（1868）年に大型カメラを入手した彦馬は、屋敷内に大スタジオを建て、営業写真家として多くの庶民と来訪者を撮影し、弟子を育て、風景を撮影し、外国人に写真を販売して富を成した。長崎大附属図書館が1999年に老舗洋古書店から入手した外国持ち帰りの彦馬アルバムは、明治4～7（1871～1874）年に彦馬が撮影した49点の大版写真（平均196㌢×166㌢）を収載する。これらは彦馬の自信作であり、同時代のキャプションのない彦馬写真のベンチマークとなるものである。

写真①と写真②は同じ船団の別アングルである。対岸の工部省長崎製作所の丘には、明治7年4月に完成したお雇い外国人宿舎が見える。大浦川の左岸に8月台風の被害跡が見られるので、撮影時期は明治7年秋と分かる。とすれば船団は、明治7年秋に台湾の出兵から帰還した龍驤（りゅうじょう）や雲揚率いる日本海軍の艦船ではないかと思われる。

明治5年に各藩の艦船を編入して健軍された日本海軍は、佐賀の乱、西南戦争、台湾や韓国への出兵に出役し、長崎を補給港とした。作品はそれぞれの「視点場」から撮影され、構図が熟考されている。

写真③は、明治4年に明治政府に接収され、長崎製鉄所から工部省長崎造船所となり、同5年に再び改名された工部省長崎製作所である。左の丘上に上記の外国人宿舎が確認できる。

安政6（1859）年の第二の開港後、お茶は長崎港第一の輸出品であった。明治7年ごろ長崎の茶輸出はピークにあった。**写真④**は外国人居留地で製茶された茶箱を真茶（こさ）で梱包（こんぽう）する風景である。当時、大浦にはグラバー商会、オルト商会、リンガー商会、ウォルシュ商会、中国商社、そして出島にはクニフラー商会の製茶場がひしめき、欧米に向けて煎茶の緑茶が大量に輸出された。

アルバムには人物の自信作も収載されている。

写真⑤は英語で東伏見宮と記されている。これは明治7年の佐賀の乱に征討総督として長崎を訪問した東伏見宮嘉彰（後の小松宮彰仁親王、1846～1903）である。彦馬撮影の人物写真としてポーズ、構図、表情、陰影が秀逸である。

嘉彰親王は世襲親王家である伏見宮邦家の第8皇子であり、王政復古で総裁・参与とともに三職の一つとして設置された議定から軍事総裁に進んだ。戊辰戦争では奥羽征討総督として官軍の指揮を執り、明治10（1877）年の西南戦争にも旅団長として出征している。ちなみに、明治38年（1905）年に長崎を訪問して三菱長崎造船所の所長宅に占勝閣と名付けた東伏見宮依仁親王とは別人である。

写真⑥は、明治7年ごろ撮影された最後の大村藩主純熙（すみひろ）（1831～1882年）・嘉庸（よしつね）子夫妻と、隆子、利宇、知久子ら娘たちである。このとき彦馬は中町にあった大村藩蔵屋敷（現中町教会）に出向き、庭に敷物を敷いて大型カメラで旧藩主の家族を撮影したようである。見る目が中心に集まるように人物を三角形に配置し、娘の着物の裾を横に流し、目線がそれぞれ散らばるように指示されている。空間も柱や床でうまく分割され、戸板に描かれた鯉絵も構図に取り込まれている。これも彦馬の自信作であった。

戊辰戦争の功績で大村藩知事に任ぜられた純熙は維新後、東京に移住。明治4年の廃藩置県で失職し、同年11月から明治6年まで岩倉使節団に加わりアメリカから欧州を回っていた。よって撮影されたのは帰国直後である。

写真⑦は、大スタジオで撮影された上野彦馬の家族写真。椅子に座るのは右が彦馬の母伊曾、左が長女のにわ。後列は右から二女で牧家に嫁いでいたちえ、彦馬の妻むら、33歳の彦馬、三女のぬさ、四女このである。人物の配置に長幼の序が配慮されている。退屈そうににわにもたれる子どもはちえの長男元治郎、左はその長女なかの兄妹である。

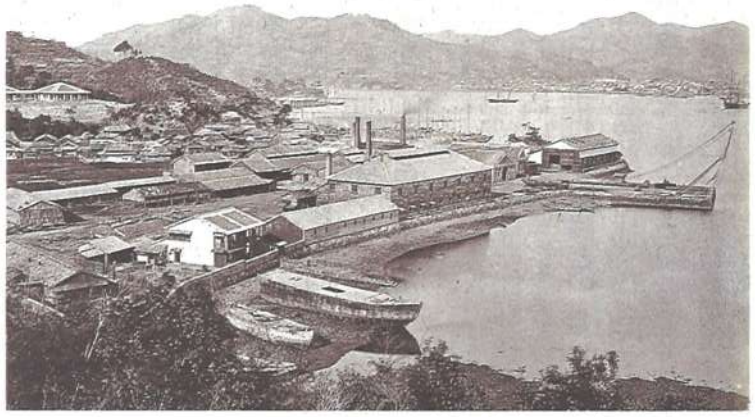
ここでもカメラを凝視する彦馬を中心に、人物がシンメトリカルに配置され、目線は散らされている。レンズの蓋を外して露光したのは弟子だったと思われる。完成度が高い作品で、彦馬の写真術は円熟期を迎えていた。

（長崎外国語大特任教授）

＝偶数月の第3日曜付サンデーぶんかに掲載＝

①大浦居留地と長崎港（写真はいずれも長崎大附属図書館蔵）

②グラバー住宅から見た長崎港



③グラバー住宅から見た長崎港　1874年ごろの工部省長崎製作所

④茶箱の梱包風景　大浦居留地

⑥大村藩主大村純熙と家族

⑤東伏見宮嘉彰親王

⑦彦馬の家族　1871年ごろ撮影

長崎新聞 2024（令和6）年4月21日掲載